

特集テーマ「改元」

エッセイ

「昭和末期の 小さな出来事」

加藤 導男

昭和の終わり頃、私は銀行の横須賀の支店に勤務していました。

その支店では防衛大学校（以後防大と記します）との取引があり、入学式・卒業式（テレビ等で総理大臣の訓辞や、最後に卒業生が椅子をけって、学帽を空中に飛ばしながら、出ていく報道が有名です）の来賓席に私は何度か招待を頂き列席いたしました。（その頃の総理大臣は中曽根・竹下登首相で、間近で訓辞を聞くことができました）

入学式・卒業式も最初の式は広い校庭で行い、防大の卒業生が機長である自衛隊機や最後はブルーインパルスが祝賀飛行をやってくれるもので、壮観なものでした。

ただし、入学式では貧血で倒れる新入生がいて、私は冗談っぽく「我が国の防衛は大丈夫ですか？」と問うと、会計本部の課長補佐の人

が、「卒業する頃は見違える様になるので心配はいりません」と応えてくれました。

防大の体育教科の水泳は、横須賀から海上に見える猿島への遠泳で、これをパスしないと卒業出来ないともいわれていました。

卒業時期になると、防大の応接室で、卒業生から集めた同窓会費として定期預金として預け入れるため、卒業生の代表者と会うのですが、毅然とした態度で、敬礼をしながら、「これを定期預金にしたい、宜しくお願いいたします」と挨拶され、その清々しい姿に圧倒された思いがあります。

防大は防衛省の幹部候補生で、防大の学生は特別職公務員の身分であり、被服・寝具・食事等も用意され、毎月相当な額の手当や、六月や十二月には期末手当も支給されます。

当時、当方の長男は高校生で、私から防大を受験することを勧めましたが、納得せず、一般の私大に進みました。

昭和六十三年（1988年）の春過ぎ、防大の会計本部より相談がありました。

前述の様に、防大の学生は毎月教授・先生の給与と同じ日に手当が支給されており、地方銀行が現金を届け、学生はクラス担当の先生から手渡されていました。

しかし、八月は学生が帰省することが多く、先生は学生の実家に書留で送金する等々、手間暇がかかるので、解消策の検討を要請されたのである。

銀行の本部と協議し、学生に口座を設けてもらい、ATMを利用することが最善策との結論を得て、会計本部に回答しました。

会計本部は、防大の構内にATMを設置することを決め、同大学は二つの銀行に構内にATM設置を決定し、都市銀行の当行と、これまで給与・学生手当を届けていた地方銀行が指定を受けた。

そして、それから、支店を上げて、学生の口座開設に全力を上げ、また、銀行本部とも給与データの受け渡し等々の手順等に、多忙な時間を要しました。

そして、年内に向け、ATMコーナーの設置を行い、このシステムのスタートをきりたいと防大も銀行も必死でした。

しかし、その年も進むにつれて、

天皇陛下の重篤が報道されるようになってきていました。

そして、十一月にATMコーナーの設置が可能となり、準備に追われました。

防大から連絡が入り、ATMコーナー開設の開所式のセレモニーを行いたいというので、打ち合わせを行い、お茶とお菓子、それに記念品の贈呈を行いたいとのこと、費用は銀行が負担することになりました。

その纏めは担当が担当することとなり、その地方銀行とも協議し、万全を期しました。

その当日、開所式の準備は整いました。が、天皇陛下のご容態の報道の中、なんと紅白の横断幕が張られていたので、防大の会計課長補佐の方に、「これでいいのですか」と問うと、「上司とも協議済で問題ありません」との返答があった。

開所式は無事完了しました。

年が明けた昭和六十四年（1989年）一月七日、天皇は崩御され、翌日に平成に改元された。

（完）